



すゝめ

患者さんと慶應義塾大学病院をつなぐ
コミュニケーションマガジン

KEIO
UNIVERSITY
HOSPITAL
.....
Communication
Magazine

Vol. 13
July 2021

ご自由に
お持ちください



KEIO

KEIO UNIVERSITY
HOSPITAL
100th ANNIVERSARY

免疫難病患者さんの人生を守るお手伝い

多数の臓器が障害される免疫難病の患者さんの人生を守るため、さまざまな診療科の専門医、看護師、薬剤師などがチームでサポートします。



広報誌タイトル「すゝめ」とは

タイトルは明治5年から9年にわたって出版された17編を数える
福澤諭吉の大ベストセラー『学問のすゝめ』に因んでいます。

免疫難病患者さんの生活を取り戻す ～克服を目指したチーム医療～



リウマチ・膠原病内科 医師
かねこ ゆうこ
金子 祐子

リウマチ・膠原病内科は、免疫異常から全身の臓器障害をきたす自己免疫疾患を診療する科です。本来免疫は自分と自分以外を識別して自分以外（ウイルスや細菌など）を攻撃し排除する役割をもっていますが、自分自身の臓器を攻撃してしまうのが自己免疫です。関節リウマチ、全身性エリテマトーデス、多発性筋炎・皮膚筋炎、強皮症、シェーグレン症候群などの自己免疫疾患を中心として、最近では家族性地中海熱など自己炎症と呼ばれる、もともとは小児の疾患と考えられていた疾患の成人発症も拝見します。内科における多くの専門分野は肺や心臓など臓器別ですが、リウマチ・膠原病内科は臓器横断的に幅広く診療するのが特徴です。

リウマチはもともとラテン語の「流れる」を意味する *rheuma* が語源で、体中を痛みが流れる病気として紀元前から認識されていました。特に関節リウマチは1・0%前後、つまり100人に1人の有病率で決して稀な疾患ではありません。

患者さんが全身の痛みと変形、機能障害で大変苦しい思いをされるのみならず、労働や趣味の機会が失われることもしばしばあります。これまでは、有効な治療薬がほとんどなく、副作用が多いとわかつていながら副腎皮質ステロイドに頼らざるをなかった時代が長く続きましたが、近年病態の中核にある物質を直接的に抑制する薬剤が開発され、目覚ましい進歩を遂げてきています。早期治療で長期予後が大きく改善されることも証明され、関節リウマチの患者さんは発病前と変わらない生活を送ることが可能となりました。関節リウマチ以外の膠原病はまだそこまでには至っていませんが、現在多数の有望な分子標的治療薬が開発段階にあり、将来さらに進歩することが期待されています。当院のリウマチ・膠原病内科では、積極的に分子標的治療薬を導入して患者さんが生活の質を取り戻すことができるように取り組んでおり、現在では約2000名の関節リウマチ患者さんの約6割が寛解を達成しています。



病棟カンファレンス



腎生検



キャピラロスコピー



関節超音波検査

リウマチ・膠原病は、関節、皮膚、肺、筋肉など多彩な臓器障害をきたします。それぞれの臓器の専門科と連携しながら総合的診療にあたります。当院では免疫異常に伴う疾患を統括する「免疫統括医療センター」を開設し、皮膚科、整形外科、眼科、消化器内科、呼吸器内科とともに、複数の臓器障害を有する患者さんに対応できるように整備しています。疼痛管理が難しい場合には、「痛みセンター」とも連携をしています。また、慢性疾患であるリウマチ・膠原病は、患者さんのさまざまなライフステージ・ライフイベントに対応する必要があります。看護師、薬剤師ともチームを組んで、患者さんの人生全体を考えながら診療に臨んでいます。

このように慶應病院では、リウマチ・膠原病という免疫異常による複雑な難治性全身性疾患に対して、多くの診療科や部門が協調しながら最適な医療を提供し、患者さんが罹患前の生活を取り戻せるように日々取り組みんでいます。



炎症性腸疾患の患者さんの よりよい生活のために

消化器内科では、消化管（食道、胃、小腸、大腸）や、肝臓、膵臓など、非常に幅広い消化器臓器に生じる多彩な疾患の診療を行っています。その中でも免疫統括医療センターでは、消化管に生じる免疫難病である炎症性腸疾患（潰瘍性大腸炎やクローン病など）の診療にあたっています。この炎症性腸疾患は免疫系の異常により、下痢や血便、腹痛など多彩な症状を引き起こすため、仕事や日常生活などに大きく支障をきたしてしまします。そのため、疾患の活動性をしっかりとコントロールすることが重要です。近年、異常な免疫などを抑える抗体製剤（生



物学的製剤）が開発され、この疾患の治療が飛躍的に向上しました。当院の免疫統括医療センターでは、この治療を患者さんに安全かつ安心して受けていただくよう、多職種によるチーム医療体制を整えています。初回の治療では専門薬剤師が薬剤の説明・指導を行い、患者さんの不安の払拭に努めています。また、投与中は薬剤を熟知した看護師が注意深く観察することで副作用の早期発見を行い、副作用が生じた際には常駐医師と連携し迅速な対応ができるように努めております。また、皮膚炎や関節炎など、消化器臓器以外に合併症が生じた患者さんに対しては、他科と横断的かつ密接な連携を行うことで、多角的な視点で総合的に患者さんの生活の質の向上が達成できるようにしています。このように、免疫難病に苦しむ患者さんが安心して世界最高水準の治療が受けられるよう、これからも日々取り組んで参ります。

多職種チームで免疫難病の克服を目指す 免疫統括医療センター

私達が普段何気なく目にしていく皮膚は、物理的な外力や微生物、紫外線などの様々な刺激から内臓を守る人体最大の臓器です。同時に、古くから「皮膚は内臓の鏡」とも言われているように、皮膚には内臓疾患に関連して様々な症状が現れます。このように、皮膚には内外からの影響によつて様々な変化がもたらされますが、私達皮膚科はそれらを目で見て診断し、血液検査や組織検査などを通じて症状の成り立ちを探り、それらの結果をもとに治療を行っています。

このような診療を行う性質上、皮膚科は昔から多くの診療科と連携をしながら患者さんの治療に当たつて参りましたが、その重要性は近年の医学の進歩によつて更に増しております。例えば、乾癬という病気は、長年ごく一部の例外を除いて皮膚だけに症状が現れる疾患と考えられていました。しかし、近年では約2割の患者さんで手指や背骨などの関節に炎症が起きていることが分かった他、潰瘍性大腸炎やクローン病などの炎症性腸疾患

との関連性も示唆されるなど、全身に影響が及ぶ免疫系の疾患と考えられるようになりました。

当院の免疫統括医療センターは、このような多数の診療科にまたがった受診を必要とする免疫系の疾患を持つ患者さんにとつて有用な診療体制となつております。それぞれの疾患のエキスパートの医師だけでなく、それらの病気を持つ患者さんの悩みを知る看護師、治療薬の有効性や安全性に精通した薬剤師などが一つのチームとなつて最適な治療を行うことを心がけております。患者さんお一人おひとりの病状や生活環境に合わせた治療を行えるよう、今後も日々取り組んで参りたいと思います。

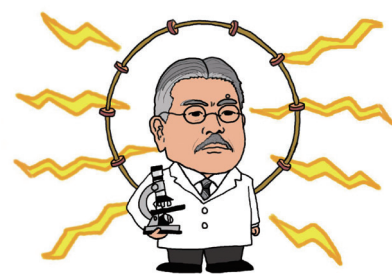
皮膚だけでなく 全身の健康を考えたチーム医療



基礎・臨床が一体となって 新型コロナウイルスに立ち向かう

慶應ドンネルプロジェクト

新型コロナウイルス感染症の第一波に見舞われた昨年、医学部と病院は慶應医学の原点を思い出しました。初代医学部長・病院長の北里柴三郎先生が掲げた「基礎・臨床一体型医学・医療の実現」という理念です。この難局を乗り越えるには、医学部の教室や、病院の診療科などの部門が壁を取り払い、ひとつになって研究に取り組まなくてはなりません。医療に直接従事する医師は患者さんに対してベストの医療を尽くし、患者さんに接しない基礎医学者は、すぐに様々な研究に取りかかりました。北里先生がベストの流行に立ち向かい、ベスト菌を発見した130年近く前の出来事と重なります。当時の日本の医学ではドイツ語が沢山使われており、北里先生は、ドンネル（Donner）つまり「雷」と畏れられていたことから、新型コロナウイルスに立ち向かう様々な研究は「慶應ドンネルプロジェクト」と総称されるようになりました。免疫関連、ウイルス検出、ウイルスゲノム解析、重症化、疫学、治験やワクチンに関するものなど、すでに80報を超える論文報告がなされ、現在も研究が進んでいます。基礎・臨床がまさに一体となって新型コロナウイルスに立ち向かっています。



イラスト：玉川知鮎（薬剤部）

慶應 COVID-19 ドンネルプロジェクト

研究責任者：天谷 雅行（医学部長）
実務責任者：佐谷 秀行（臨床研究推進センター長）
広報責任者：松尾 光一（総合医科学研究センター長）



▲ Webサイトはこちら

免疫関連プロジェクト

- 血清中抗体の検出
- 細胞性免疫解析
- 中和抗体定量系開発・人工中和抗体作製
- ワクチン接種前後の免疫状態評価
- 抗ウイルスモノクローナル抗体作製

ウイルス検出プロジェクト

- 唾液によるPCR解析
- ウイルス粒子高感度検出

疫学解析・レジストリ構築プロジェクト

- 発症動向、感染様式に關与する疫学的解析
- 感染と消化器症状の関連解析
- 大学内感染状況調査
- COVID-19の周産期合併症への影響
- 感染とがんとの関連解析
- ドンネルレジストリの構築
- 感染と甲状腺機能異常の関連解析

ウイルスゲノム解析プロジェクト

- 配列決定
- 配列情報と感染経路解析
- ウイルス変異と重症度解析

重症度指標開発プロジェクト

- 感染者腸内細菌叢解析
- 内皮細胞障害・血栓形成による重症化解析
- ウイルスによる中枢神経障害
- アビガンの作用機序解析
- ホストゲノム解析
- 血清バイオマーカー同定
- 重症化・予後予測因子検出
- 病勢評価方法の有用性解析

治療・ツール開発プロジェクト

- 感染者血漿バンク・血漿治療
- COVID-19 治験タスクフォース
- 飛沫感染防止ボックス型シールド



遺伝性乳癌卵巣癌症候群（HBOC）とは、BRCA1もしくはBRCA2という遺伝子に生まれつき変化があることで乳がん、卵巣がん、前立腺がん、脾がんなどになりやすくなる病態のことをいいます。そのため、がんが生じてきていないかを定期的に調べる検査や、がんが生じる前に卵巣や乳房を摘出する予防的な手術が考慮されます。さらに、これらの遺伝子の変化はご自身に留まらずご家族にも引き継がれる可能性があるのでご家族のフォローも求められます。昨今のHBOC診療を取り巻く社会環境の変化は著しく、特に2020年4月からHBOC診療の変化は著しく、検査や手術などが保険適用となったことで、HBOC

遺伝性乳癌卵巣癌症候群センター （HBOCセンター）

～患者さんとそのご家族に合った遺伝診療をお届けするために～

産婦人科（婦人科）医師 こばやし ゆうすけ 小林 佑介

診療は今後より身近なものになっていくと思われるかもしれません。このような背景をもとに、当院では2021年4月に遺伝性乳癌卵巣癌症候群（HBOC）センターを設置しました。当センターでは、産婦人科（婦人科）、一般消化器外科（乳腺班）、一般消化器外科（肝胆脾班）、泌尿器科、産婦人科（生殖）、腫瘍センター、臨床遺伝学センターのHBOC診療関連各科の専門医が深い専門的な知識のもとで領域横断的に診療にあたり、HBOC患者さんの個々の状況に合わせた最適な治療をご提供していきます。また、HBOCの診断には遺伝学的検査を伴うため、当センターでは検査の前から結果の理解にいたるまでを臨床遺伝専門医と認定遺伝カウンセラーによる専門的な遺伝カウンセリングでサポートいたします。遺伝学的検査でHBOCと診断された方、HBOCと診断されたご家族がいる方、病歴や家族歴、がん遺伝子パネル検査などからHBOCが疑われる方はぜひ当センターにご相談ください。



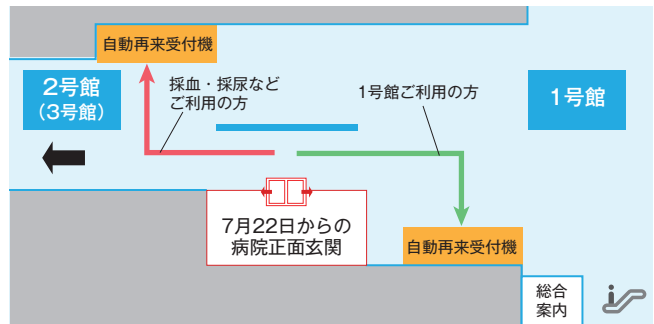
病院入口の変更および開錠時間の変更に関するお知らせ

開錠時間が 6:45 → **7:45** になります。

7月22日(木)より、正面玄関の場所が変更となりました。また、防犯対策ならびに感染予防対策徹底のため、正面玄関の開錠時間は7:45に変更となりました。自動再来受付機は2箇所に設置されますので、**ご来院の目的にあわせて、向かわれる先の自動再来受付機をご利用ください。詳細は右の図をご参照ください。**

2022年4月下旬に工事が完了し、正面玄関は従来の位置に戻る予定です。皆様にはご不便をお掛けしますが、ご理解の程何卒よろしくお願い申し上げます。

自動再来受付機のご利用について



1号館ご利用の方 → **入って右側** **にある自動再来受付機**

採血・採尿などご利用の方 → **入って左側** **にある自動再来受付機**

セカンドオピニオン外来について ～オンライン相談を開始しました～



当院では、他の医療機関で治療中の患者さんを対象に、セカンドオピニオン外来を行っています。セカンドオピニオン外来は、現在の診断内容や治療方法について当院の専門医が意見や判断を提供し、患者さんやご家族が理解を深めることで、より良い治療法を選択するための外来です。

未だ新型コロナウイルス感染症の終息が見えない中、セカンドオピニオンを希望されても遠方からの移動やご来院が難しい状況が続いています。当院では、ご来院いただかなくてもパソコンやスマートフォンを使ってご相談いただける「オンライン・セカンドオピニオン」を開始しました。オンラインをご利用いただくことにより、移動によるご負担を軽減し、患者さんのご都合の良い場所から専門医にご相談いただくことが可能です。

対面での外来も、安心してご来院いただけるよう最大限の感染対策を講じながら、継続して行っています。対象の診療科やご予約方法などの詳細については、ホームページに掲載しています。ご不明な点はセカンドオピニオン外来事務局までお問い合わせください。

相談対象者

- ・成年患者本人
- ・成年患者本人の同意を得た一親等以内の家族
(やむを得ぬ事情により患者本人が来院出来ない場合に限り)
- ・未成年患者の親権者

費用(税込)

相談料	対面	30分まで	22,000円	オンライン	30分まで	33,000円
		30分超45分まで	33,000円		30分超60分まで	66,000円
		45分超60分まで	44,000円			
診断料	対面 オンライン	相談をお受けする担当医が、当院の専門医による診断が必要と判断した場合は、相談料に加算して診断料をいただきます。				各 5,500円

※相談時間は30分を原則としております。相談内容により最長60分までとします。

〈お問合せ〉 セカンドオピニオン外来事務局 TEL: 03-3353-1139(直通)



詳細はこちら

〈受付時間・休診日〉

外来診療時間 8時40分～12時00分、13時00分～16時00分
 面会時間 ※新型コロナウイルス感染拡大防止のため、現在、面会は原則禁止とさせていただきます。詳しくは病院のウェブサイトをご覧ください。
 休診日 日曜日、第1・3土曜日 / 国民の祝日・休日 / 年未年始(12月30日～1月4日) / 慶應義塾の休日(1月10日)

〈診療担当医表〉

このQRコードをスマートフォンなどで読み取っていただくと診療担当医表がご覧になれます。なお病院入り口脇の電子掲示板にも掲載しています。

